



【2011年度震災支援活動報告書—完成】

2011年4月に始まったEd.ベンチャーの東日本大震災支援に関する報告書がまとめ、3月30日に刊行となりました。支援の継続は当然大切ではありますが、ある期間を区切って、その事業を総括することも重要だと考えて来ましたが、区切りをいつにするかは悩ましい問題ではありましたが、春夏秋冬という季節がめぐる「1年」は、振り返る期間としても妥当ではないかと判断し報告書作成に取り組みました。

報告書は3部構成で、第1部は、支援のたびに現地状況を分析し、次の支援を考えるために発行してきた34号の支援通信です。第2部は、支援先のみなさんに寄稿をお願いしました。陸前高田からは被災学校8校、11月に立ち上がった教育支援チーム「まつ」の理事お二人、モビリア避難所でのすたんどばいみーの支援の際に大変お世話になった八起プロジェクトです。万石浦ライオン学校からは、お別れ会での子ども作文、保護者のみなさんからいただいたコメントです。さらに、福島富岡町の学校からも寄稿いただきました。第3部は、支援者からです。支援隊に加わり継続的に参加してきた方、多額の寄付をいただいた方、支援活動に継続的に関心を持ち続けていただいていた方などに寄稿をお願いしました。

報告書は関係各所への配布と高額な寄付をいただいた方に配布しましたが、残部がありますので、ご希望の方はEd.ベンチャー事務所にお問い合わせください。

【陸前高田学校訪問】

4月12日～14日、支援隊としては20日ぶりに陸前高田を訪問しました。前回の訪問を「震災1年」の直後ということや、学校関係者の大きな人事異動があったこともあり、何となく落ち着かない感じがしていましたが、今回の訪問では、「祭の後」という言葉があてはまってしまうような寂しい雰囲気を感じてきました。

もちろん、こうした雰囲気の中で現地で強く感じるようになったのは、現地に入るまでに関東で出会ったいくつかの出来事とも関係があります。一番大きな出来事は、これまで「災害派遣証明」の交付をNPOが拠点を置く自治体に依頼することで、高速道路の通行料が無料となっていました。しかし、4月1日より、この災害派遣の適用は「瓦礫撤去車両のみ」に認められる制度に改変となりました。これからこそ継続的な粘り強い支援が必要という段階になってのこの成り行きには驚くばかりです。加えて、被災地に入るボランティアが増えている状態ではないのにもかかわらずです。「震災は終わった？」と首を傾げなくなる事態が着々と進行しています。

さて、今回の訪問は、Ed.ベンチャーの報告書をお渡ししながら、新年度の被災学校の様子を確認することでした。陸前高田市内の14校の小中学校の11校の副校長が代わるという大きな人事異動は、学校現場にどのような影響をもたらすのかという点で、いろいろ案じられることがありました。特に、私たちのように外部から「支援」という名目で学校と関わっている団体にとっては、窓口となる副校長の交代は、今後の関係に大きな影響があります。そうした不安をもちながらの訪問でしたが、予想を大きく裏切ったのは、副校長の多くが、被災学校への赴任に対して「戸惑い」以上に、大きく「意気込み」を話されたことでした。お話によると、自宅や実家が陸前高田市内にあり、家が流されたり、親族などが亡くなったりの経験をされていて、「昨年度、陸前高田に異動が決まっていたが、人事異動の凍結のために戻ってこられなかった。早く戻りたかった」「地元のために、早

く戻って働きたいと思っていた」とのことでした。そのために、私たちの昨年度の活動についても、熱心に耳を傾けていただきました。なかには、すぐに、教育支援チーム「まつ」の会員になっていただいた方もおられました。大きな不安をもった学校訪問でしたが、希望や期待がほの見える学校訪問になりました。

【学校行事の意味】

4月の第2週は、陸前高田市の小友中学校の3年生が、東京に修学旅行に来ておりました。Ed.ベンチャーの第32号と一緒に案内を配信しましたが、小友中学校では、修学旅行の最終日に、東京の岩手銀河プラザというアンテナショップで、震災後、復旧した地場産業の食品を売る活動が組まれていました。この活動は、震災以前にはなく、震災後の修学旅行に、新たな意味を加えるべく組まれたとのことでした。そう言えば、1年前に、小友中学校を訪問した時に、「今年の修学旅行をやるかどうか議論になっている」との話がでて、「今ここで、旅行に、特に東京に行くことの意味は何だろうと思うのだが、震災があったから、この学年は修学旅行に行けなかったということにしたいくないという強い希望があって…」と話されていたことを思い出しました。

この日の岩手銀河プラザには、小友中学校と一緒にもう一校、岩手県内の内陸の中学校が地元産の商品を売る活動を行っていました。小友中学校の子どもたちは2度目の活動ということもあってか、不慣れな感じがあるのに対し、もう1校は長く取り組んできた活動であることから、幟旗や生徒の着る衣装も手が込んでいました。「どうなることか」と思いつつ、私たちも陸前高田産の商品を買い込み、その後の様子を見守っていたのですが、あれよあれよという間に、お客の列は小友中学校の販売所に並び、生徒たちも勢いがついてきて、立派な売り子に大変身していました。小友中学校のものの売れ行きの方が良かった理由は定かではありません。そこに、被災学校をアピールする何かの提示されていたわけではありませんでしたから。もし、あえて違いを探すとすれば、岩手銀河プラザに出入りする人は、岩手に縁のある方が多く、「陸前高田」と言えば「被災」と結びつき、その生徒が何かを売っているということが売れ行きにつながったのかもしれませんが。偶然お話をすることになったある男性の方は、岩手県山田町の出身で、震災後、仕事がなくなり東京に出てきたそうで、「時々、方言を聞きたくなくて、ここに来る」と話し、「今日は、偶然だけど、いいものに出会った」と話して、目に涙をためておられました。

10時半から始まった活動は、12時に商品が完売して終了になりました。その後、披露されたのは、呼びかけと歌でした。もともとは、「お客は多くないだろうから」ということで、売り出しの最初にやることになっていたようですが、その間もなく商品が売れ始め、呼びかけとイベントは完売後に行われることになったようでした。

小友中学校の現在の3年生は14人。その歌声の響きのきれいなことにビックリしました。きっと、繰り返し繰り返し練習したことでしょう。この学年は、生徒6名が津波の犠牲になり、生徒たちはずっと「自分たちは20人」として1年を過ごして時間を積み重ねてきたと聞いてきました。

いつのまにか、岩手銀河プラザの買い物客が、14人



の生徒の前に集まってきて人だかりとなり、その歌声に聞き入っています。そして、隣と一緒に商品を売っていた別の中学の子ども達も聞き入っています。

今「学校行事」は、多くの学校で見直しが進んでいると聞きます。長年、積み重ねられる中で形骸化し意味が見だしにくくなったことにあわせて、「悉皆」とすることが争点となった標準化された「学力」重視の中で(全国学力学習調査など)、学校行事より授業というムードになっているとのこと。今回、小友中学校の修学旅行に出会い、活動の形骸化は、活動の意味の問い直しが行われるかどうかによることを強く感じましたし、また、震災によって友を失い、統廃合を目前に、今の自分たちの生きている意味を問うことに、標準化された学力が、どれほどの意味をもつのかと考えざるをえませんでした。

小友中学校の子どもたちの呼びかけと歌声を聞きながら、被災地以外にいる子どもたちに、この声を聞かせたいと思いましたが、その一方で、被災地以外の子どもたちがこの歌声の裏にあるものを感じられるのかという疑いももちました。学校現場では盛んに「交流」という名目の活動がなされますが、それは、相手に対する理解と同時に、自らを問うことなくして成り立たないようにも思いました。

【福島県富岡町支援】

陸前高田市からの帰路、福島で高速道路をおりて、三春町で再開している富岡町の学校によりました。陸前高田を出るのが遅くなったために、学校は施錠の時間になってしまったのですが、ミシンの支援依頼をされた小野先生は待っていてくださいました。

中学校の教員の中には、学校規模による教員配置数と教科免許による教員配置があわず、免許外教科を、都道府県教委の許可をもらって教えることがあります。小野先生も、音楽の教科免許をもっておられますが、家庭科も教えているとのこと。昨年度は開校が9月だったために必要なかった家庭科の教具が、今年はないということがあるようで、今回のミシン3台の依頼となりました。

富岡町の小中学校との支援約束であった30万円は、今回の支援で使い切りましたが、今後も継続的に連絡し、訪問することをお約束しました。福島の浜通りは、まだ震災が終わらず、そして、復旧すらしていないということを忘れてはいけないのだと思いました。

【支援隊活動記録】

■陸前高田支援 ○4月12～14日午前(第39回): 学校訪問(報告書配布・学校ニーズ聞き取り)、教育支援チーム「まつ」理事会参加、現地業者(山十)支払、現地NPO・業者支援報告書配布(八起プロジェクト・山十・三上教材)

□支援隊メンバー: 家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、柿本隆夫(下福田中学校)

■福島富岡町支援 ○4月14日午後(第9回): 支援物資(ミシン3台)提供

□支援隊メンバー: 家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、柿本隆夫(下福田中学校)

■寄付(3月25日～4月19日) 櫻井千夏(歯科衛生士)、柿本隆夫(下福田中学校)、権田和子

★★継続的な支援のために、寄付を募っております。ご協力をお願いします★★

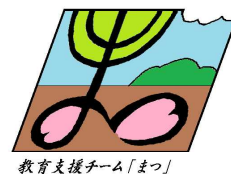
横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp



教育支援チーム「まつ」

「まつ」通信 No.1

本格的始動

2012年4月26日発行

平成24年度が始まり、教育支援チーム「まつ」の活動も本格的に始まりました。4月14日には、Ed.ベンチャーからも3名の方が加わり、新年度第1回の理事会を行いました。今回の議論の大きな課題は3つでした。一つは、Ed.ベンチャーの現地スタッフ兼「まつ」の事務局長として働いてくださった臼井美穂さんが、震災前のお仕事であった介護福祉士としてのお仕事に戻られることになり、新たに事務局長を選出する必要が出てきたということです。二つ目には、新年度の助成金申請の結果、赤い羽根共同募金から170万円の助成を受けることができました。ただし、300万円申請に対して切られたのは、学校への物品支援の部分でした。この助成金を使って、どのように活動をしていくのかを検討する必要があります。三つ目には、団体として始めてひらく「総会」の段取りを整えることです。

第1については、現在、副代表が2名体制となっていますが、そのうちのお一人である佐々木善仁先生が副代表から事務局長の職に移ることになりました。また、監事の選出も必要であり、候補となった方に打診していくことになりました。第2については、話し合いの中で、「蓄える」をモットーに活動するという結論に至りました。これまでEd.ベンチャーの支援が入っていた3中学校は、次年度の統廃合が決まりましたから、今年度は学校も、次年度以降を見越した物品購入になることが予想されます。一方で、今年度の大きな人事異動、そして、次年度の3校から1校の統廃合によって、市内の中学校教員はだぶつくことが予想されており、それにより市内を離れる教員も多く出てくる可能性があります。という状況の変化の中で、今年は、市内で学校教育に関わる多くの方に会員になっていただいて、仮に陸前高田を離れなければならないことになっても、この地とのかかわりを持ち続けられるような形をつくっていくことが目指されることになりました。また、助成金では、「まつ」の設置費用が認められていますので、事務所の整備は十分に行うことができそうです。第3の総会については、**6月15日午後18時～**ということが決まりました。場所の決定にはもう少し時間がかかりますが、関東圏の会員の方も、是非、陸前高田に足を運んでいただいて、総会を盛り上げていただきたくお願いします。

14日の理事会では、陸前高田の復興がどうなるのかということが、いろいろな話に絡んで出てきました。地盤沈下がひどく、震災前よりも海岸線がずいぶん山側になり、以前のような形で住むことが難しいことは、はっきりしています。ですから、山や林を造成していくことになるのですが、そのような移転を見越して大手資本が入り込み、山側の土地を買い、さらに値段があがるのをまつということも起きています。陸前高田市が財政的に苦しいことは確かなことですが、それにさらに追い打ちをかけるような資本の動きもあり、復旧した町の姿を見るのはいつのことかと心配をするばかりです。

★会員募集中です★陸前高田の教育をともに考えましょう★

教育支援チーム「まつ」

〒029-2208 岩手県陸前高田市広田町字大久保 124-1 旧広田水産高校仮設住宅 19-6

Tel/Fax:0192-56-3325 e-mail: teammatsu01@gmail.com